

## 巻頭言

### 「炭酸泉誌 第2巻」発刊にあたって

人工炭酸泉研究会会長  
入 来 正 躬

最近になって炭酸泉の話をよく耳にする様になりました。人工炭酸泉研究会のお世話をさせて頂いておりますので、記憶に残るためかもしれませんし、あるいは炭酸泉に興味を持つ方々が増えたためかもしれません。後者であれば嬉しいことですが、これからもできるだけ多くの情報を本研究に生かしてゆくことが重要であり、高濃度の二酸化炭素を含む温泉あるいは鉱泉を利用してきた方々の経験をお聞きする機会を、早い時期に持ちたいと考えております。

本誌に掲載した中村昭先生の総説にもある様に、日本にも昔から炭酸泉があり、その数については“意外に多い”という気がします。多くの炭酸泉があったにもかかわらず、ヨーロッパで早くから炭酸泉の治療効果が取り上げられたのに対し、日本ではあまり取り上げられなかったのは何故でしょうか。その原因の一つに、日本とヨーロッパの入浴習慣の違いが影響しているのではないのでしょうか。日本では、高温多湿の夏でも、寒い冬でも気持ちよく入浴することが必要とされ、熱い湯に入って十分に暖まるのが入浴の目的の一つとなっています。一方、ヨーロッパでは湿度が低いためもあり、シャワーですませることが多く、また入浴においても温度の低い湯が用いられます。炭酸泉の効果は、水温が33～35と低いときに最も特徴的に示されるため、熱い湯が好まれて使用される日本では、炭酸泉の効果がはっきりしなかったのでしょうか。この点については、今後、各地の炭酸泉の使用経験から何らかの情報が得られることを期待しています。

本誌第2巻で特に強調しておきたいのは、原著が掲載されていることです。日本での高濃度人工炭酸泉の研究が始まってまだ2年足らずではありますが、原著としてまとめられる成果が得られたことは大変喜ばしいことであり、また、研究者の努力に敬意を表したいと思えます。

原著の投稿に際し、本誌では2名の審査員による査読を行うことに致しました。現在、研究活動の業績として発表論文が重要視されておりますが、研究成果として認められるためには、発表論文が正式な審査の過程を経て学術雑誌に掲載されることが必要となってきております。大変貴重な投稿論文であり、また研究努力を無駄にしないためにも本体制を整えることと致しました。また、本研究が進むにつれて、看護、ケアなどに従事する方々からの研究発表も増えるのではないかと考えていますが、研究会として必要な体制を作っておけば、さまざまな変化に対してきちんとした対応が容易であろうと考えております。現時点では何となく大げさにも見えますが、この様な理由から論文審査の体制を整えさせていただいた次第です。尚、査読は編集委員会で行いますが、編集委員は本研究会の世話人の方々にお願い致したいと思えます。また、査読のための実務は、本誌を製作しておりますアイベック社に依頼することと致しました。

今後、皆様方の研究が更に進み、多くの研究成果が得られると共に、本研究会が有益なものとして発展してゆくことを祈りつつ、ご挨拶とさせていただきます。